

イザヤ書 35 : 1～10

ルカによる福音書 18 : 35～43

「憐れんでください」

<エルサレムに入る前に>

ルカによる福音書の18章は、9章から始まった、イエスさまと弟子たちのエルサレムへ向かう旅の終盤にあたります。一行は、北のガリラヤ地方から、南のエルサレムへと向かっています。今日出て来る「エリコ」という町は、そのエルサレムの少し手前の町です。

そして、19章の中盤になって、一行はユダヤ人の中心地、神殿があるエルサレムの町の中に入っていきます。そこからとうとう、イエスさまが十字架に架けられるまでの一週間が始まるのです。

さて、イエスさまは、なぜエルサレムへ向かっておられるのか。それは、前回の18:31～33で、イエスさまがこう語っておられました。「今、私たちはエルサレムへ上って行く。そして、人の子について預言者が書いたことはみな実現する。人の子は異邦人に引き渡されて、嘲られ、侮辱され、唾をかけられる。彼らは人の子を、鞭打ってから殺す。そして、人の子は三日目に復活する。」

イエスさまは、人々を罪から救うために遣わされた神の御子です。そして、その救いは、イエスさまがすべての人の罪をご自分の身に背負い、すべての人の受けるべき苦しみと死を引き受け、ご自分の命を捨てて下さることによって、実現するのです。

それが、預言者を通して旧約聖書で語られていたことであり、それが、神さまの救いのご計画です。このことを実現するために、イエスさまはエルサレムへ向かっておられるのです。

そして、死なれた後、三日目に復活させられる。この最も重要なことも、イエスさまは弟子たちに予告しておられました。

しかし18:34では、弟子たちにはこのイエスさまが語られたことが、何にも分からなかった、理解できなかった、と記されていました。まだ、その時ではなかったのです。

今日と次回に語られる、エルサレムへ入る前の、エリコの町での出来事。それは、このような弟子たちに対して、イエスさまが語られたことが必ず実現する。神さまの救いのご計画が必ず成し遂げられる。そのことを、具体的な証拠をもって約束して下さるような、確かであることを示して下さるような、そんな出来事です。

<エリコの盲人>

さて、イエスさまがエリコの町に近付かれたとき、そこに「ある盲人が道端に座って物乞

いをしていた」とあります。

町の出入り口です。多くの人が行きかう場所を選んで座り、一人でも多くの人から施しを受ける。人から与えられたもので、その日の糧を得る。盲人はそんな生活をしていました。

人が多い場所ですから、おそらくこの盲人は、当時話題になっていたイエスさまの噂を耳にしていたはずで、神の国を告げている方がいる。病を癒し、悪霊を追い出し、死人をよみがえらせた方がいる。

それを聞いて盲人は、お会いできるなら会ってみたい。そう思っていたに違いありません。

そんなある日。彼は、周りの様子がいつもと違うことに、音や気配で気付きます。多くの人々の足音、騒めきが、目の前を通り過ぎていきます。「これは、いったい何事ですか。」

誰かが答えてくれました。「ナザレのイエスのお通りだ。」

それを聞くやいなや、この盲人は叫び出しました。「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください！」

声が届かなければ、イエスさまはそのまま遠くへ行ってしまうかも知れません。自分で追いかけて行くことは出来ない。もう、この方とお会いするチャンスはない。それで何とか振り向いてもらおうと、何とか気付いてもらおうと、彼は大声を上げたのです。

#### <弟子たちの無理解>

ところが、39節にはこうあります。「先に行く人々が叱りつけて黙らせようとした。」

「先に行く人々」。それは誰でしょうか。イエスさまと共に、先頭の方を歩いている人々。それはもしかすると、イエスさまの十二弟子のことかも知れません。

もしそうであるなら、このことで、弟子たちがイエスさまの教え、御心、成そうとしておられることを、まだ何にも理解していないということが、ますます鮮明になります。

以前、18：15以下で、イエスさまに祝福してもらおうと乳飲み子を連れて来た人々を、弟子たちが叱った、という出来事がありました。

しかし、イエスさまはその弟子たちに対して憤り、乳飲み子を呼び寄せ、神の国、神さまの救いとは、こんな乳飲み子のような者たちのものなのだ、と言われたのです。

何も出来ず、ただ求めることしか出来ない。与えられたものを、受け取ることしか出来ない。そのような者こそ、ただ恵みによって与えられる神さまの救いを受け取り、神の国に入れられるのだ。そう教えられたのです。

それなのに、今回も弟子たちは、イエスさまに憐れみを求める、ただ救いを求める無力な盲人を叱りつけ、黙らせようとしてしまいました。彼らにとっては、イエスさまの歩みの邪魔をするな。煩わせるな。そんな気持ちからだったかも知れません。

しかし弟子たちは、本当のイエスさまの御心を、成そうとしておられることを、まだ全然理解していないのです。

<目が見えるように>

ところがこの盲人は、そうやって叱りつけられても、怒鳴られても、まったく諦めようとしませんでした。「ダビデの子よ、わたしを憐れんでください！」そう叫び続けたのです。

もう今しかチャンスはない。イエスさまがここを通られることは、もう二度とないかも知れない。彼は必死に叫び続けました。

盲人はイエスさまを「ダビデの子イエスよ」と呼びました。「ダビデの子」とは、当時ユダヤ人たちが、ダビデの子孫からユダヤ人の王が立てられ、自分たちの王国を復興してくれる、という預言から、メシア、救い主の意味で使っていた言い回しです。

盲人も、どういう救い主であるかは、弟子たちと同様、理解はしていなかったかも知れません。それでも、御言葉を伝え聞いて、行なっている御業を聞いて、イエスさまという方に望みをかけた。他でもない、救い主イエスさまに、憐れみを求めて叫び続けたのです。

すると、イエスさまは、その叫びを聞き取って下さいました。イエスさまは、神さまは、確かに求める者の叫びを聞いて下さるお方です。

それはイエスさまが、18章の最初にある、裁判官に訴え続けるやもめの話で教えられたことでした。気を落とさずに絶えず祈り続けなさい。神さまに求め続けなさい。なぜなら、神さまは必ず叫びを聞き、必ず救いを与えて下さるお方だからです。そして、神の御子イエスさまもまた、その叫びを受け止めて下さるお方です。

イエスさまは立ち止まって、その盲人をそばに連れて来るように命じられました。ご自分の許に来るようと、招いて下さったのです。

そして彼が近づくと、お尋ねになりました。「何をしてほしいのか。」

…先程まで、盲人はイエスさまに、「わたしを憐れんでください」と叫んでいました。

彼は、これまでも多くの人々に、「憐れみ」を乞うてきました。施しを下さい。何か恵んで下さい。今日の食べ物を与えて下さい。

しかし今回、この盲人がイエスさまに求めたことは、これまで他の人には求めたことがないようなことでした。他の人には、求めようもないことでした。

彼は、こう言ったのです。「主よ、目が見えるようになりたいのです。」

盲人は、沢山の施しではなく、今この時を凌ぐためのものではなく、自分の苦しみの根本を解決してほしいと、イエスさまに求めたのです。「主よ、目が見えるようになりたい。」

それは、ダビデの子イエスさまにしか、求めることが出来ないことでした。

そして彼は、今、目の前に立っておられる方をこそ、この目で見たいと、そう強く願っていたのではないのでしょうか。

これを聞いて、イエスさまは言われました。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。」

すると、盲人はたちまち見えるようになった、とあります。

彼は目を開き、目の前に、見たいと思っていた方の顔を見ました。自分を見つめて下さっている、イエスさまの眼差しを、その自分の目で受け止めました。救い主であるお方に、自分が見つめられているということが、見えたのです。

この時、彼にとって「見えるようになった」とは、目の視力が医学的に回復した、というだけの出来事ではありません。彼の目は、風景を映すようになっただけではありません。

「主よ」と呼んだイエスさまと向かい合い、眼差しを受け止め、視線を交わしたのです。彼は、救い主と出会い、その目で、まことの救いの光を見たのです。

#### <あなたの信仰>

イエスさまは、彼に言われました。「あなたの信仰があなたを救った。」

これは、盲人が強い信仰を持っていたから、粘り強く、確固とした信仰を持っていたから、そのおかげで見えるようにしてもらった、救われた、という意味ではありません。

盲人は、何も出来ない。ただ座りこんで、施しを求めることしか出来ない。そんな中で、イエスさまの教えを耳にして、御業を耳にして、この方なら、今の自分を救い出して下さるかも知れない、と一縷の望みを抱いただけです。イエスさまという方は、本当に神さまが約束したメシアなのかも知れない。そう信じたい、そしてその力に頼りたい、と思ったのです。

そして、この方との出会いを、交わりを、必死に求めた。叫び続けた。いやむしろ、彼は本当に、そうすることしか出来なかったのです。

しかし、そもそも彼が、イエスさまにこそ希望を抱き、この方にこそ救いを求めたいと思ったのは、イエスさまがそのようなお方であると知らされたからです。

そしてそれは、イエスさまご自身が、これまで神の国の教えや、力ある数々の御業によって、ご自分こそ救いを實現する救い主であることを、人々に明らかにしてきて下さったからです。だからこそ、エリコの盲人のところまで、イエスさまのことが伝えられたのです。

希望を抱かせて下さったのも、イエスさまを求めさせて下さったのも、イエスさまの力に依り頼みたいと願わせて下さったのもまた、イエスさまの御力によることです。

そして、イエスさまが尋ねて下さった。「何をしてほしいのか。」

彼は、イエスさまにしかお出来にならないこと、「目が見えるようになること」を願いました。イエスさまが、この願いを引き出して下さいました。そしてこれは、イエスさまはそれがお出来になるに違いないと信じた、彼なりの信仰告白だったかも知れません。

そして、イエスさまはそれを、「あなたの信仰だ」と言って、受け入れて下さったのです。

#### <見える、見えない>

「あなたの信仰があなたを救った。」そう言われて、彼は自分が救っていただくために何

かした、などとは思わなかったでしょう。

しかし、盲人だったこの人は、自分が何も持っていないこと、自分の中には依り頼むべきものが何もないことは、よく知っていたでしょう。身動きできず、善い業も行えず、人に施すなどもっての外です。当時は、体の不自由さは罪の結果だとさえ言われていました。何も持っていないどころか、マイナスです。それで、助けを求めるしかなかっただけです。

しかし、イエスさまは、神の国はそのような人のものだ、と言われました。当時の社会で盲人は、乳飲み子と同じように、何も持たない、受けることしか出来ない人の、代表のような存在と言えるでしょう。

しかし彼は、耳にしたイエスさまの御言葉を、その御業を、真剣に受けとめました。イエスさまというお方を、真剣に見つめました。そして、自分を救って下さるかも知れないお方として、自分に手を差し伸べて下さるお方として、この方との交わりを心から求めたのです。それをイエスさまは良しとして下さり、そこにイエスさまは信仰を見出して下さるのです。

実は、目が見えていて、イエスさまの周りを取り巻く群衆よりも、彼を叱りつけた人々よりも、目の見えない彼の方こそ、よっぽど救い主としてのイエスさまを見つめ、語られた御言葉を、行なわれた御業を、真剣に受け止めていたのではないのでしょうか。

わたしたちもまた、自分は見えていると思っていながら、実は何も持っていない自分の姿も、目の前に立っておられるイエスさまのことも、何も見えていない、見ようとしていないかも知れません。

さて、肉体的な目を開かれた彼がしたことは、仕事を探しに行くことでもなく、見たかった景色を見に行くことでもなく、誰かに会いに行くことでもなく、「イエスさまに従う」ということでした。

43節にはこうあります。「盲人はたちまち見えるようになり、神をほめたたえながら、イエスに従った。」盲人はイエスさまを見た。救い主を見たのです。神の御子を見たのです。そして、ほめたたえながら、イエスさまに従った。神の御子と共に歩むようになった。ここに、見えるようになること以上の、本当の救いが実現しているのです。

#### <救いの成就>

さて、この盲人の目が開かれる出来事は、これからエルサレムで救いが実現するということの、確かな「しるし」です。

まず、イエスさまが伝道を始められた時、ルカによる福音書の4:18~にはこうありました。イエスさまが安息日に会堂に入られた時のことです。

「預言者イザヤの巻物が手渡されたので、それを開いて、こう書いてある箇所を見つけられた。『主の霊が私に臨んだ。／貧しい人に福音を告げ知らせるために／主が私に油を注がれたからである。／主が私を遣わされたのは／捕らわれている人に解放を／目の見えない人に視力の回復を告げ／打ちひしがれている人を自由にし 主の恵みの年を告げるためであ

る。』そして、言われました。「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」

イザヤ書は、神さまが救いを実現して下さることを預言しています。そして、それを実現する者こそわたしであると、初めからイエスさまは宣言しておられたのです。

イザヤ書には、「目の見えない人に視力の回復を告げ」とありました。そしていよいよエルサレムに入るところの、エリコの町で、そのことが確かに起こったのです。

これは、神さまのご計画が、必ず実現することの約束です。これからイエスさまは、エルサレムに入り、裁判を受け、十字架に架かって、苦しみを受けて、殺されます。それは、必ず実現します。そして、復活もまた、必ず実現するのです。盲人の目が開かれた出来事は、これらの神さまの約束が、必ず成就することの「しるし」です。

これから起こる十字架の出来事は、イエスさまに従う者にとっては、受け入れがたい、信じ難い出来事です。盲人だった男もまた、目を開かれて従った約一週間後には、自分に憐れみの眼差しを注いで下さったイエスさまの柔和なお顔が、痛みと苦しみに歪み、血に染まるのを見なければなりませんでした。

そして、「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救った。」そう語りかけて下さったイエスさまが、あの時に道端で「憐れんでください」と叫び続けた自分よりも、もっと激しく、もっと悲痛な叫び声をあげるのを、聞かなければなりませんでした。

しかし、イエスさまは、三日目に復活させられます。人間の罪の贖いを成し遂げ、死を滅ぼし、勝利して下さいます。目を開かれた男は、後の初代教会で、多くの兄弟姉妹に、イエスさまと出会い、その御業を見つめた証人として、自分の身に起こったすべての出来事を語ったに違いありません。そのためにこそ、彼の目は開かれたに違いありません。

そして、何も分からず、イエスさまが十字架で処刑される時に、イエスさまを見捨てて逃げ出してしまった弟子たちもまた、復活のイエスさまと出会った時に、このエリコでの出来事も、あらゆる出来事も、あらゆる御言葉も、イエスさまの十字架と復活を指し示していたこと。救いの実現の約束であったことを、はっきり理解することになるのです。

今わたしたちは、旧約聖書の預言の御言葉、神さまのご計画と、既にそれが実現されたこと、イエスさまの十字架と復活の出来事を告げ知らされ、聞いています。

聖書の御言葉のすべては、このイエスさまこそ、わたしたちの罪を赦し、よみがえりと永遠の命を与えて下さる救い主だ、ということを指し示しています。

わたしたちは、この御言葉を真剣に聞き、このイエスさまの救いを見ることを、このイエスさまの憐れみをいただくことを、神の国に入ることを、心から叫び求めているのでしょうか。

わたしたちは、イエスさまにしかお出来にならないこと。罪を赦していただくこと。よみ

がえりと、永遠の命をいただくことを、この方にこそ、求めるべきなのです。この方にこそ、求めて良いのです。

わたしたちもまた、祈り続けなければなりません。

「わたしを憐れんでください。」「主よ、目が見えるようになりたいのです。」

### 【お祈り】

天の父なる神さま

あなたの恵みを見つめることが出来ず、自分の無力さを見つめることが出来ず、わたしたちこそ、見るべきものが何も見えていない者であることを知らされます。

どうか、わたしたちの信仰の目を開いて下さい。イエスさまの眼差しを受け止め、十字架と復活の御業を、憐れみ深いあなたの救いの恵みを、見つめる者とならせて下さい。

そして、エリコの盲人が目を開かれて、イエスさまに従う者とされたように、わたしたちもまた、イエスさまに従う歩みこそが、まことの救い、まことの喜びであることを知ることが出来ますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン